

事業戦略レポートへのフィードバックにおけることばの表現と構造 — 社会人 MBA における文章評価の可視化 —

松木 知徳 (SBI 大学院大学 経営管理研究科)

E-mail: tomonori.matsuki@mba.sbi-u.ac.jp

要旨

本研究は、社会人大学院におけるレポート評価および教員から学生へのフィードバックコメントに含まれる言語表現の特徴を可視化し、教育効果向上に資する表現構造の明確化を目的とする。生成 AI の進化により学修環境が変化中、評価やフィードバックも属人的感覚に依存せず、学修者の納得感とモチベーション向上につながる必要がある。本研究では、レポート本文、教員評価点、およびフィードバックコメントを分析し、得点の高低による定性的特徴および評価言語の傾向を検討した。その結果、具体的な名詞・動詞・形容詞を用いた価値実現への言及が評価と関連することが示唆された。最後に、生成 AI を活用したフィードバック生成の可能性について展望する。

1. 背景と目的

社会人大学院生は多様な実務経験と学修目的を持ち、通信制の社会人大学院では学修意欲の継続や悩みの解決への負荷が高い。そのため、数少ない教員と学生の接点である成果物への評価とフィードバックの質は学修成果に大きく影響する。一方で、教員が行う評価には暗黙的基準が存在し、学生の心理への配慮などが介在し、指摘事項が抽象的になるなど教員による差が生じる。場合によっては評価に対する納得感が損なわれ、学生は改善に向けた適切なフィードバックの機会を失う可能性がある。本研究は、評価とフィードバックにおける言語表現を可視化・構造化し、教育の標準化と質の向上に資する示唆を得ることを目的とする。

2. 先行研究

学生へのフィードバックの手法や重要性については主に教育学の分野で多くの研究が行われている。山本 (2015) は教師の日常的な観察や言葉かけによる評価は恣意的に受け取られる可能性があり、科学的、客観的な観点からの批判があるとしている。また、渡邊 (2020) はフィードバックコメントが前回の授業の振り返りや授業の連続性に寄与し、指導内容や教員との関係性を補うとしている。特に大人数の受講者に対して短期間で評価、フィードバックを求められる大学において教員の負荷は大きい。一方、生成 AI などを使用して学修支援の質を向上させる取り組みも行われている。中村ほか (2024) は AI フィードバックに対する大学生の調査により、納得感と必要性を感じた肯定的意見、長文や機械的な返答に対する否定的意見の両面を説明し、フィードバック強度の調整が必要と結論づけている。本稿においても、生成 AI の活用を含めてフィードバックの質を高め社会人大学院生の学修に寄与することを想定している。

3. 分析対象と方法

3.1 分析対象データ

筆者が担当する社会人大学院の科目である「事業戦略構築論—社内起業コース」の期末課題のレポートのうち、研究目的で使用する許可を得た 25 本を対象とする（表 1）。なお、レポートの設問は以下のとおり。

自身の所属組織で提案したい新規事業アイデアと自組織でそれを実現する意義についてレポートとして纏めてください（750 字～1500 字+図表も可、WORD 文書）。

【注意点】

- ・ 簡単にどんな事業・組織なのか（前提）を述べること
- ・ 本講義で習得したフレームワーク、考え方などを参考にすること（ただしすべて理論どおりである必要はない）

表 1 分析対象データ

学生レポート	事業戦略構築論 — 社内起業コース 25 本
教員評価	100 点満点
コメント	教員コメント全文（定性分析）
期間	2026 年 1-2 月提出

3.2 分析方法

レポートの中から高得点（85 点以上）10 本、低得点（75 点以下）10 本を選択し、言語特徴を抽出する。第一に、名詞・動詞・形容詞それぞれについて頻出単語の出現数を比較し、成果物の差異を分析する。第二に、教員である筆者のフィードバックコメントにおいて頻出単語の数を比較する。上記から得られた結果を基に評価を標準化するためのルールを設定する。生成 AI によりフィードバックコメントを作成し、筆者のフィードバック内容との比較により表現方法について示唆を得る。

4. 結果

4.1 高得点／低得点レポートの言語的特徴

高得点者は、「市場」「地域」「収益」「実現」「資金調達」など価値実現に向けた動きや事業の具体に関わる語が多く、価値創造や施策と事業成果の因果関係への言及が多い。一方、低得点者は「評価」「対応」「型」「外部」「仕組み」など抽象的なビジネス用語が多く、理論の引用・具体像の不足が見られる傾向があった。表 2 は、得点層別における頻出語の代表例を示したものである。

表2 得点層別のレポートの頻出単語

高得点レポートの頻出単語 (例)	低得点レポートの頻出単語 (例)
市場/地域/収益/実現/資金調達 など 価値創出や因果関係への言及が多い	評価/対応/型/外部/仕組み など 理論の引用・具体像の不足が見られる

4.2 フィードバックコメントの表現差

高得点レポートには、「ブランド」「実現性」「公共性」など戦略や社会的価値に関わる名詞を用いた評価と、「伝わる」「繋がる」等の発展的動詞を伴う具体的単語が多い。一方、低得点レポートには、抽象度の高い承認表現とともに、不足点の指摘が中心となる傾向が見られた (表3)。

表3 フィードバックコメントにおける主要単語の出現

■ 名詞			■ 名詞			■ 動詞			■ 形容詞		
H	単語	L	H	単語	L	H	単語	L	H	単語	L
100	ブランド (4)	0	33	顧客 (6)	67	100	伝わる (2)	0	100	しやすい (2)	0
100	実現性 (3)	0	27	事業計画 (11)	73	100	繋がる (2)	0	100	大きい (1)	0
100	お金 (2)	0	20	課題 (5)	80	100	払う (1)	0	57	高い (7)	43
100	ロジック (2)	0	0	戦略 (4)	100	100	異なる (1)	0	50	見づらい (2)	50
100	体制 (2)	0	0	業界 (4)	100	100	高める (1)	0	0	よい (3)	100
100	公共性 (2)	0	0	ビジネス (3)	100	100	取り進む (1)	0	0	興味深い (2)	100
100	利用者 (2)	0	0	強み (3)	100	100	回る (1)	0	0	素晴らしい (1)	100
100	可能性 (2)	0	0	施策 (3)	100	100	増える (1)	0	0	良い (1)	100
100	提供 (2)	0	0	獲得 (3)	100	100	抑える (1)	0	0	少ない (1)	100
83	スキーム (6)	17	0	領域 (3)	100	100	減らす (1)	0	0	難しい (1)	100
80	対応 (5)	20	0	アイデア (2)	100	50	いく (14)	50	50		
75	意義 (4)	25	0	ポジショニング (2)	100	50	打ち出す (2)	50	50		
75	期待 (4)	25	0	メリット (2)	100	50	行う (2)	50	50		
60	自社 (10)	40	0	モデル (2)	100	50	見込める (2)	50	50		
60	ブラッシュアップ (5)	40	0	合致 (2)	100	43	できる (7)	57	57		
60	サービス (5)	40	0	存在 (2)	100	33	高まる (3)	67	67		
56	具体 (9)	44	0	技術 (2)	100	0	うる (3)	100	100		
50	事業 (32)	50	0	現在 (2)	100	0	感じる (1)	100	100		
50	ターゲット (6)	50	0	社内 (2)	100	0	かかる (1)	100	100		
50	魅力 (6)	50	0	精度 (2)	100	0	乗り越える (1)	100	100		
50	事業者 (4)	50	0	経験 (2)	100	0	加わる (1)	100	100		
50	価値 (4)	50	0	軸 (2)	100	0	当たる (1)	100	100		
50	明確 (4)	50	0	違い (2)	100	0	目指す (1)	100	100		
50	評価 (4)	50	0	部分 (2)	100	0	結び付ける (1)	100	100		
			0	限界 (2)	100	0	苦しむ (1)	100	100		

5. 考察

前章の結果から、自身がレポートの評価において、事業計画の具体性および価値実現に向けたアクションの有無を重視していると捉えることができる。評価に関わらず学生の成果物の中で承認できる点を見いだすことは、学生のモチベーション向上にポジティブな影響をもたらす。一方、抽象的な言葉で褒められても実務的な理解や修正すべき事項が見え難くなることもあり、対象者に応じてフィードバックの強さを調整する必要がある。その際に、評価、フィードバックに基準が求められ、用いることばの選択や構造化することで属人的な評価、フィードバックを防ぐことができる。

6. 今後の展望

昨今、生成 AI を用いた学修支援の在り方が研究される中で、通信制大学院の特性を生かして更なる学生の成果物へのフィードバック精度向上が求められる。抽象的表現でとにかく褒めることを避け、評価可能な具体点を明示する。価値実現に向けた適切なアドバイスをしながらも、学生の気持ちに寄り添えることばの選択を行う。このようなプロセスとともに、学修の質を高めるエージェント開発や教員のスキル向上にも貢献したい。

参考文献

- 山本 佐江 (2015). 日本におけるフィードバック概念受容の検討. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 63(2), 297-314.
- 渡邊 裕 (2020). LMS を活用した短期大学生の授業におけるフィードバックコメントの効果. 研究紀要 (小池学園), 18, 63-74.
- 中村 謙斗ほか (2024). リフレクションシートに対する生成系 AI フィードバックが大学生の学修に与える影響. 日本科学教育学会年会論文集, 48(1), 539-542.